

氏 名 鈴木 晋介

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 208 号

学位授与の日付 平成 23 年 3 月 24 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティ
と「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究

論文審査委員 主 査 教授 杉本 良男
准教授 白川 千尋
准教授 三尾 稔
教授 関根 康正 日本女子大学
教授 高桑 史子 首都大学東京

論文内容の要旨

イギリス植民地支配期、南インドからスリランカに移住したプランテーション労働移民の子孫たちが今日もプランテーションに働きながら暮らしている。彼らを「エステート・タミル」と呼ぶ。本研究は彼らのアイデンティティの在り方を生活の場における「ジャーティヤ」（これは「カースト」とも「民族」とも翻訳されてきたものだが、むしろ「ひとの種類・まとまり」というほかないものである）のつくられ方・組成に着眼して明らかにすることを目的とした人類学的研究である。

近・現代スリランカにおいて、エステート・タミルという人々には絶えず何者であるかという「括り」の問題が付き纏ってきた。スリランカ政治的独立（1948年）とともに市民権を喪失した彼らには「国民」としての括りが、また所謂シンハラ対タミル民族対立問題の文脈では「民族」としての括りが、そしてエステート（プランテーション）という独特の生活環境からは「カースト」の括りの問題が、それぞれ日常生活と齟齬をきたすように彼らの暮らしを覆ってきたのである。

こうした境遇の中で彼らが紡いできたアイデンティティの在り方は、「類一種」の種的同一性ないし提喩的同一性の論理を根底に有するアイデンティティ・ポリティクスの視角からは捉えきれものではない。序章では、オリエンタリズム批判以降の「同一性の政治学批判」の議論の延長上に本研究を大きく位置づけ、提喩的同一性の論理とは異なる、「そうでないアイデンティティ」の考究を本論の大きな問いとして提示する。つづいて、本論の「ジャーティヤ」という対象への着眼の趣意を明示し、対象に切り込む方法・観点として援用する修辞学的術語と分析に用いる語彙（「括り」、「つながり」、「まとまり」）を整える。

序章につづく第1章では、エステートの地理的分布とエステート・タミル人口を統計数値でおさえた後、彼らをめぐる歴史的・政治的背景に言及する。移住の経緯と三つの政治的できごと（「民族としての範疇化」、「市民権問題」、「民族対立問題」）を通覧する。第2章、3章はジャーティヤの検討のための準備的記述である。第2章では調査地（中央州の小さなゴム園と隣接シンハラ村とにまたがるひとつの生活の圏域）を概観する。第3章は調査地の経済状況を検討し、エステート住人の経済的均質性、彼らと村人の結びつきの経済的必要性という下地をミクロの経済的データに基づいて提示する。

第4章～8章は本論のボディとなる生活の場におけるジャーティヤの組成をめぐる記述・考察である。エステート・タミルというジャーティヤは、対内的にみればいくつかの異なるジャーティヤ（ふつう「カースト」と訳されるもの）から成っており、対外的にみれば隣村シンハラといった異なるジャーティヤ（ふつう「民族」と訳されるもの）との関係の中にある。検討はこれに合わせ、対内的・対外的と領域を二つに分けて行う。一連の検討には導きの縦糸となる一つの問いがある。括りを拒絶しながら生きるエステート・タミルたちは、なおかつ自らを「ひとつのジャーティヤ」と語る。導きの問いとは、彼らの「ひとつであること」の意味、その組成はいかなるものか、である。

第4～6章は、対内的領域すなわちエステート・タミル・カーストの領域において、「ひとつのジャーティヤ」の組成を検討する。第4章「エステート・タミル・カースト1」で取り組むのは、カーストをめぐる「括りの相」の提示である。エステートという生

活環境では、特定の名称をもって現存するカーストが限りなく形骸化し、抽象的な括りと化して人々を圍繞する状況が生じている。先行研究にみる従来のエステート・タミル・カースト像の解体作業を通じて、括りの相というものを析出する。第5章「エステート・タミル・カースト2」では、カーストをめぐる「つながりの相」に目を転じる。人々は括りと化したカーストを放棄し、換喩・隠喩的論理をつたったひとの種類・まとまりのつくり直しに向かっている。いわば彼らはエステート・タミルというひとまとまりの巨大なカースト(=ジャーティヤ)を生きようとしている。その組成の具体レベルとして「親族のつながり」と「職業のつながり」という二つの体系を明らかにする。第6章「エステート・タミル・カースト3」では、つながりをつたうひとまとまりへの動きが、深く生活の境遇に根ざしていることを論じる。「長屋の成女儀礼」を題材に、生活の境遇に根ざした「長屋の共同性」というものを析出し、ひとまとまりとなっていくエステート・タミルをミクロの水準で捉える。

第7章からは対外的領域、いわば「民族」のレベルに検討を移す。第7章はこの検討の前提として、シンハラ・カーストを対象に個別的な一章をとる。エステート同様、シンハラ村においてもカーストの括りの相とつながりの相は明瞭に析出される。とくにカースト作法の運用に着眼し、つながりを希求するシンハラ・カーストにおける潜在的なひとまとまりを浮かび上がらせる。エステート・タミルが生活の場で接続するのは、このつながりを組成とするシンハラの一まとまりと、である。この議論をふまえ、第8章では対外的領域におけるエステート・タミルというジャーティヤの組成を検討する。生活の場におけるエステート・タミルとシンハラは「対他」的差異化=つながりの構成によって、民族対立状況下の提喩的括りによる「排他」的分断線の突破を図っている。人々は提喩的な括りのジャーティヤを、換喩・隠喩的論理に拠るつながりのジャーティヤへと変換する。こうした生きるやり方に、提喩的同一性の論理に対する対抗的意義を捉える。

一連の検討を通じて明らかになるのは、生活の場のエステート・タミルというジャーティヤが、まるで換喩・隠喩的論理に依拠したつながりの織物のようにつくり上げられていること、そして、そのアイデンティティは類一種の論理ではなく、換喩・隠喩的同一性として把握できることである。第9章ではこの換喩・隠喩的同一性というものの本領の考察に向けて踏み込む。考察のための題材は、ジャーティヤをつながりによって生きる人々が執り行う女神祭礼である。彼らの儀礼のやり方にみる「他性」と「偶然性」を鍵に、本論の大きな問い、提喩的同一性に拠らない「そうでないアイデンティティ」のかたちを論じる。それは常に「対他」的なつながりの可変性により創造され、対他的なつながりの、そのつながりによる何者であるかの定まりの、根源的な偶然性に対する想像力を根底に有している。この想像力が、見かけの必然性をもって人々を圍繞する提喩的論理の突破の契機を成し、またつながりの創造的な実践を促し、肯定する力となる。括りに圍繞される境遇に生きてきたエステート・タミルという人々が生活の場で形づくってきたジャーティヤの在り方、そして女神祭礼のやり方には、こうしたつながりのアイデンティティのかたちが素朴に、しかし先鋭に映じている。

本論で明らかにする生活の場におけるジャーティヤの組成そしてつながりのアイデンティティの様相は、今日の人類学的研究の重要な課題のひとつとしての「共同性」の問題を考える上で、また、2009年内戦終結以降のスリランカ社会の変動をミクロレベルで把握し

ていくための、有効な視座と民族誌的資料としての意義を有するものである。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、イギリス植民地支配のもとで、南インドからスリランカへプランテーション労働者として移住したいわゆるエステート・タミル（インド・タミル）の社会を対象に、周囲のシンハラ社会との関係の中で再編される社会的紐帯のありようを丹念に記述し分析した人類学的論考である。著者は、スリランカ中央高地部のエステート・タミル村落社会及び周囲のシンハラ村落社会においてのべ20ヶ月間の長期にわたる緻密な現地調査を実施して詳細な調査資料を得るとともに、広汎な文献資料を参照しながら分析・考察を進め、スリランカのジャーティヤ（カースト集団）意識の基層に迫る意欲的な論考をまとめている。

本論文において著者は、周到な論理立てと詳細な分析によって、ジャーティヤ（カースト集団）が、外在的で支配や権力と親和性の高い提喩的な「くくり」と、換喩的、隠喩的な「つながり」、との2つの論理によって成立していることを浮き彫りにしている。著者はここで、一見高度に抽象的な修辞学的分析概念と、現地社会の生活の場のリアリティから抽出された分析概念とを、常に民族誌的事実に照らしながら往還を繰り返すことで、行論の説得性を高めている。

論文は、全9章の本論部分と簡潔な序章と終章から成っている。全体の構成は一見人類学的民族誌記述の常道に沿ったものであるが、これを新たな構想によって再編、発展させようとしたものである。

序章においては、本論文の基本的な概念につき先行研究のレビューを行いながら批判的に再検討し、論者としての再定義を行っている。つづく第1章から第3章までは本論の中心部分への予備的考察の部分である。第1章では、対象となるエステート・タミルの地理的、歴史的、政治的背景について、第2章では、調査対象である、シンハラ社会に囲まれたエステート・タミル社会についてそれぞれ概観し、第3章では調査地の経済状況について、とくに周囲のシンハラ社会との結びつきの必要性に注目しながら概観される。

第4章から第8章までは、本論文の主要部分であり、ジャーティヤの組成をめぐる記述、分析、考察が行われている。第4章では、みずからの民族誌資料をふまえながら、これまでエステート・タミル社会について支配的言説となってきた提喩的な「くくり」の相としてのカースト像を解体し、第5章では、周辺のシンハラ社会との関係性の中であらたに人びとのカテゴリーやまとまりのつくり直しに向かう換喩的、隠喩的な「つながり」の相について述べられる。第6章は、成女儀礼におけるカースト、民族を超えた長屋の共同性に注目し、生活の場における「くくり」と「つながり」の相のダイナミズムについて述べられる。

第7章は、周囲のシンハラ社会について、エステート・タミル社会との関係性の中での「くくり」の相と、あらたなまとまりのつくり直しに向かう「つながり」への希求について述べられ、第8章では、これまでの論述をもとに、タミル、シンハラ関係の中で、対他的差異化の論理としての「つながり」の論理によって、排他的分断線を現出する「くくり」の論理の突破を図っているとの暫定的な結論が導き出される。

第9章では、第8章までの比較的抽象的な議論を女神儀礼の事例に則して実証的に検証している。結論部分としての終章では、これまでの議論を要約し、本論文での考察が、

2009年内戦終結以降のスリランカ社会の変動をミクロレベルで把握するさいの基礎的な民族誌的資料となるとともに、今日の人類学的研究の重要な課題である「共同性」の問題を考える上で有効な視座をあたえるものであると、その意義について述べ論述を締めくくっている。

本論文は優れた文章力と首尾一貫した強固な論理によって支えられており、構成面において内的完結性がきわめて高いものとなっている。とくに、既存の人類学的・社会学的諸概念をいったん棚上げにした上で、修辞学的な概念（提喩、換喩、隠喩）と、「くくり」、「つながり」という生活の場からひきだした分析概念とを交差させながら、きわめて独創的かつ説得的な論述を展開している。このような野心的な試みの結果明らかになった、「くくり」、「つながり」などの鍵概念で析出される生活現実の論理は、多様な研究課題への展開の可能性をひらいている。その意味で、本論文は詳細な現地調査経験からくる生活実践の場に足場をおいた民族誌的研究であるとともに、広汎な視野に立った一般理論にまで発展させる人類学的思考の最良の部分を実現させた研究として高く評価される。

一方、審査委員からは何点か一層の研究の進展にむけた提言がなされた。まず、本論文がスリランカの特定のコミュニティについての記述と分析・考察に集中していることから、解明した論理の妥当性の検証を幅広い事例研究との比較等によって行うことが今後の課題となる。スリランカにおける他のエステート・タミル社会との比較、その故地である南インドのタミル社会との関連性の追及および比較などへと展開することで、広く南アジア・カースト論への貢献が果たされるものと期待される。また、本論文で示された「つながり」の論理は、1970年代よりインド・カースト研究で常に大きな存在であり続けてきたルイ・デュモンの構造論的親族論の構築主義的な観点に立った発展型と位置づけられる。さらに同様の議論が東南アジア研究などでも注目されていることから人類学理論一般へのいっそうの貢献が期待される。

以上のことから、審査委員は一致して本論文が博士の学位にふさわしい優れた論文であると認定した。